

二国間交流事業 セミナー報告書

令和4年4月24日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[代表者所属機関・部局]
東京大学・大学院総合文化研究科
[職・氏名]
教授・石原 あえか
[課題番号]
JPJSBP220203602

1. 事業名 相手国: ドイツ (振興会対応機関: DFG) とのセミナー

2. セミナー名

(和文) ヴァイマル所蔵の貴重コレクションとゲーテの自然研究について

(英文) Discourse on Goethe's studies on natural Science with emphasis on the collections in Weimar

3. 開催期間 2022年3月22日 ~ 2022年3月25日 (4日間)

4. 開催地(都市名)

ヴァイマル(Weimar)

5. 相手国側セミナー代表者(所属・職名・氏名【全て英文】)

Klassik Stiftung Weimar · Senior Reseacher · Dr. Eckle, Jutta

6. 委託費総額(返還額を除く) 1,995,000 円

7. セミナー参加者数(代表者を含む)

	参加者数	うち、本委託費で渡航費または日本滞在費を負担した場合*
日本側参加者等	3名	2名
相手国側参加者等	10名	0名

参加者リスト(様式B2)の合計人数を記入してください。該当がない箇所は「0」または「-」を記入してください。

* 日本開催の場合は相手国側参加者等の日本での滞在等、相手国開催の場合は日本側参加者等の渡航費を本委託費で負担した場合となります。

8. セミナーの概要・成果

- (1) セミナー概要(セミナーの目的・実施状況等。第三国からの参加者(基調・招待講演者等)が含まれる場合はその役割とセミナーへの効果を記載して下さい。関連行事(レセプション、見学(エクスカージョン)その他会合(別経費の場合はその旨を明記。))などがあれば、それも記載してください。各費目における増減が委託費総額の50%に相当する額を超える変更があった場合には、その変更理由と費目の内訳を変更しても研究交流計画の遂行に支障がなかった理由を記載してください。)

2020年度の採択決定後、Covid-19感染拡大が始まり、当初2020年夏に予定していたセミナーを何度となく延期した末、ほぼラストチャンスとなる2022年3月下旬に、最初の計画とはかなり異なるハイブリッド形式でDFGから許可が下り、ドイツ・ヴァイマルにて開催された。とはいえドイツにおいてもCovid-19感染はいまだ収束せず、またロシア・ウクライナ情勢の悪化も懸念されたが、日本側からは石原と桑原の2名のみが渡航、現地参加した。メインの会議は3月23・24日の2日間、ヴァイマルのゲーテ・シラー文書館(略称GSA)2階のペーターゼン・ライブラリーを主会場とし、ハイブリッド形式で行った。対面の場合は、ワクチン3回目のブースター接種に加え、事前のCovid-19簡易陰性確認テスト、マスク着用、1.5mの間隔維持等の条件を満たしたうえで実施、さらに3月22日と25日は参加者を極力制限したエクスカージョンとした。GSA内会場から直接の参加者は、日本からの2名に加え、ドイツ側はEckle, Schimma, HöppnerのいずれもKlassik Stiftung Weimarに所属する研究者3名の5名のみ、残る発表者・参加者はオンラインで参加した。なお、当初発表予定だった濱中は口頭発表を辞退(論文集のみ寄稿)、またドイツ側Schmuckの発表は病気のため残念ながら中止、またMaulとWeberの2名も発表を辞退した(ただしMaulはセミナーにはオンラインで、また22日のゲーテ国立博物館バックヤード案内を務め、さらに25日のエクスカージョンにも参加)。

上記辞退者を除いたセミナーの発表者は全員、当初の計画通り、事前に図版付テキストを提出、提出されたテキストは参加者全員に配布し、事前に通読を課した。セミナーの各セッションでは、発表者が主題およびその主要展開部を想起させ、必要に応じて強調・補足説明した上で、活発な討議が行われた。本セミナーでは、ドイツ語のみが使用された。事前に参加者が発表内容について予習ができていたこともあり、発表と議論は高い学術水準を維持し、示唆に富み、参加者の満足度も非常に高いセミナーとなった。

- (2) 学術的価値(本セミナーにより得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

本セミナーは、スイスからの専門家1名を含むドイツ語圏および日本の実績のある研究者たち、およびゲーテ所蔵コレクションについて専門知識と経験を備えた博物館学芸員により構成された。Eckleと石原が当初から強く希望し、最後まで諦めずに取り組んだ目標は、このセミナーを単なる研究発表会に終えず、実際の歴史的・一次貴重資料、すなわちゲーテ自身が収集した自然科学関係のコレクションや彼の直筆草稿を見ながら、参加者相互の知識・経験を活かした活発な討論・情報共有を行うことだった。これはどうしても現地での参加が必要不可欠で、オンライン会議で代替することは不可能であった。

エクスカージョンや文書館・博物館バックヤードでの調査は、感染対策上、参加者全員は難しく、人数を絞っての実施となったが、ゲーテの自然研究分野での多様な方向性について狙い通りの効果が得られた。ゲーテの色彩論、形態学、天文学、鉱物学等について(プログラム参照)、各自が未発表のテーマを扱い、続く討

論で、ゲーテ研究には他分野にわたる学際的協力が必要であることが再認識された。なおセミナーでは、自然研究者の仕事の流儀、方法論的アプローチの認識論的前提、収集と分類の哲学などが中心テーマとして活発に議論された。

(3) 相手国との交流(両国の研究者が協力してセミナーを開催することによって得られた成果)

本セミナーはゲーテ研究者ならば誰もが重要視しているが、実際の情報交換が難しいとされる1800年前後の自然科学への関心を再活性化させた。また、コレクションに関連する研究協力の糸口をつかめるなど、ハイブリッド形式であっても、参加者にとって大きな成果が得られたと考えている。

さらにヨーロッパと東アジア(日本)という異文化からの視点、たとえば江戸時代の自然科学・技術との比較・検討、相互影響関係なども興味深く、示唆に富むものだった、日独二国間レベルでの交流を促進できた。たとえばイェーナのドイツ光学博物館のバックヤード所蔵コレクションには、日本人研究者の立場から研究に協力できる標本が複数あり、これからもこれら特定の研究対象に関する相互協力・情報交換を行っていくことになるだろう。

(4) 社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

まず、ゲーテ研究の基礎にある「一次文献の扱い方、その重要性」について共通の理解が得られたことが大きい。どんなに一次資料をデジタル化して公開しても、その使い方・意味を知らなければ、研究に役立てることはできない。手稿解読技術の必要性や標本の基礎情報を、専門の学芸員との会話を通して、メンバー及びその周辺の知見とすることができた。これは2022年3月22日に日本人2名に対してMaulの案内・立ち合いで調査したヴァイマルのゲーテ国立博物館バックヤードおよびゲーテの鉱物コレクション、および25日のイェーナ・エクスカーションでのKreher-Hartmannによるイェーナ大学鉱物コレクションおよび光学博物館(現在リニューアル閉館中)のMappesおよび同教授研究チームとの交流も同様に言えることである。さらにゲーテ＝シラー文書館が所蔵するゲーテおよび彼と同時代の自然科学者の手稿(すべてユネスコ文化遺産)についてのEckle主導のガイドツアーでは、概要説明だけでなく、個々のアイテム(物や原稿)について相互に意見交換する機会が提供された。これら複数のエクスカーションおよびガイドツアーには各研究者自身だけでなく、各自が指導する学生・若手研究者たちに新しい研究課題を提供できる内容が豊富に含まれていただけでなく、文献利用技術の継承の課題についても深い示唆を与えてくれた。同時にKlassik Stiftung Weimarの欧州文書館・博物館における主導的地位を強く認識させるものであった。

(5) 若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取り組み、成果)

本セミナーの発表者は、専門技術を要求する分野のため、結果的に熟練度の高い中堅以上の研究者たちの

みになった。当初はイェーナ大学の大学院生や Covid-19 がなければ毎夏ヴァイマルで開催される Klassik Stiftung Weimar および国際ゲーテ協会の奨学生にも参加・聴講の機会を提供する予定だったが、感染予防対策上だけでなく、事前に専門的内容の未発表原稿全点を事前に配布・通読を課す必要上、今回はやむを得ず見送る形になった。しかし今回のハイブリッド形式での成功を活かし、近くオンラインで若手・初級者向けに、たとえば手稿解読の技法や専門研究者以外では扱いが難しいレオポルディーナ版を利用するための基礎知識を伝授するようなワークショップも企画したい。なお、技術と並行して、ゲーテ研究という意味では、本セミナーの成果を早く論文集という形で公表することで、あわせて国内外の、特に若手研究者たちにこの分野の重要性を伝えられると考えている。

(6) 将来発展可能性(本セミナーを実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

計画当初から、本セミナー後も Eckle はじめ今回参加したドイツ側研究者・学芸員たちとは、長期的視野で共同研究を行うことを前提としており、本セミナーを足掛かりに、さらに 2-3 年後、次回は日本国内で若手も加えた共同セミナー開催を目指して、準備を進めていきたい。

なお、文学系のセミナーの多くは発表後に発表内容を論文にまとめるが、今回は専門性が高いため、事前に全員が発表原稿を提供するというかなり珍しいスタイルをとった。その準備は結局 2 年間にも及ぶことになったが、Eckle と石原の間では常にメールやオンラインを用いて頻繁かつ綿密にドイツ語での打ち合わせを行うだけでなく、相互の研究について情報・資料交換する機会に恵まれ、その一部はすでに互いのゲーテ研究(論文や編集作業など)に反映させることができた。研究代表者相互が互いの仕事の流儀を知り、これほど緊密に連絡をとりあうことは珍しいことで、日独二国間での実際的な仕事の進め方の比較検討をする興味深い経験になった。さらに 2022 年夏休み前には、Eckle と石原のふたりで、希望する参加者(事前に回覧メールも送ったが、発表より前に原稿を提出する厳格なスタイルに戸惑う参加者も多かったため)にオンラインで、セミナー実施方法に関するオリエンテーションを企画した。この時点で相互の専門・関心を知る、いわゆるアイスブレイクもできたことは、セミナー本番がハイブリッドとはいえ、和やかかつ活発な雰囲気で開催できたのも大きな利点となったと考える。今後もこのようなスタイルを積極的に採用したい。

(7) その他(上記(2)~(6)以外に得られた成果(論文発表等含む)があれば記述してください)

本セミナーの成果は、論文集としてドイツ国内の学術出版社から刊行を予定しており、発表者各自は、今後、討論を通して得た示唆や情報を採り入れ、発表原稿を手直したうえで完成稿を提出することを決めた(現在、推敲作業中)。この後、Eckle および石原が中心となってドイツ語論文集として本セミナーの成果を取りまとめ、編集作業に入り、ドイツ国内の学術出版社から 2022 年度内に刊行予定である(ドイツ側で出版助成申請も検討中)。ドイツ文学の研究者にとっての共通言語・ドイツ語での出版が最も理想であることは自明だが、各論文には、英語もしくは日本語の要旨も掲載する。